

不信の社会

なかむら
中村

ゆずる
譲

日本教職員組合・書記長

4月春爛漫。人類は永い生活経験から、悠久の時の流れに刻みを入れて気分を一新させる知恵を生み出した。刻みが時刻。時刻と時刻の間が時間。最近読んだ五木寛之の「林住期」では、古代インドでは、人生を四つの時期に分けて考えたという。人生を100歳として考え、4期に分ける。私は、50歳から75歳の「林住期」にあたる。「林住期」にある私でさえ、春は体内に活気が漲る。自信めいたものが湧いてくる。はずである。しかし、なんとなく気分は重い。

最近、書店に並ぶ本は「希望格差社会」だとか「下流社会」だとか。「時代は閉塞状況にある」などもよく見聞きする。世相のキーワードは「不信」ではないだろうか。学校教育への分析、解釈、解説は「不信」を前提になされている。個人の考えを「大きな物語」の筋書きにあてはめて思考する。客観的な調査データに基づいて分析・理解しようとしな。だから拙速に「信頼できない」と判断する。教師には任せて置けない。教育委員会は信用できない。だから改革は私がやる。教育再生だ。科学的なデータとは、同一の条件整備をして、同じ手順で「実験（調査）」すれば、誰がやっても同じ結果や近似値になるから信頼されるのである。昨今、偽データに基づく捏造や偽装がなんと多いことか。データの改ざんもある。仮説を検証もせず「改革」を進めてよいものか。

クリーム・スキミング。やりやすい部分だけを拾い上げる。牛乳の中から一番おいしいク

リームの部分をすくう。「いろいろご議論いただいておりますが、最後は私が適切に判断いたします」。社会的合意は前提にされていない。その努力もしない。国会答弁も「適切に」が連発・濫発されている。何が「適切」なのか説明をしようとしな。多元的な価値を認め、包摂して社会的危機を回避する柔構造システムが機能しなくなっているのか、機能させないようにしているのか。「ゆとり」が感じられない。

「ゆとり教育」批判が盛んに行われている。「ゆとり」は悪いのか。辞書で引いてみる。「何かをしたあと、まだ自由にできる空間・時間・気力・体力などが有ること。余裕。」(三省堂・新明解国語辞典)。いい意味で使われる「美しい日本語」である。学校5日制とともにスタートした「ゆとり教育」は、こまごました知識を教えるよりも自然・社会体験を豊富にさせ、自然と社会(人間)の関係から自分で考える力を育むことを目標とした。人間関係が希薄化する少子化社会と擬似体験が増大する情報化社会に対応した教育理論だ。学校現場にとっては戦後直後の「教育改革」に次ぐ「期待の教育改革」理念である。

還暦を迎えた教育基本法が変えられた。これから円熟の「林住期」を迎えようというのに。「不信」から出発した「改革」は「不信」をもって応えられる。政治不信として。政党支持が低迷し、無党派層の増加がデータとして。